verse ～The avenger of blood from the past～

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｒｏｓｓ ｕｎｉｖｅｒｓｅ ～Ｔｈｅ ａｖｅｎｇｅｒ ｏｆ ｂｌｏｏｄ ｆｒｏｍ ｔｈｅ ｐａｓｔ～

【Ｎコード】
Ｎ３１１３Ｘ

【作者名】
百花

【あらすじ】
Ｃｒｏｓｓ ｗｏｒｌｄ３～Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ～から３ヶ月。ケロロの手に寄ってケロン星が乗っ取られた！？母星を取り戻す戦いが、今始まる。
Ｃｒｏｓｓシリーズ最新作、始動。

ＣＨＡＰＴＥＲ：０　複製蛙はオリジナルの夢を見るか

殺す。

『我輩』の邪魔をするモノは、なんであろうと。

「クローン」
「来ると思ってたでありますよ。我輩」
我輩が、目の前で我輩を睨む。こんな滑稽な光景が今までにあっただろうか？
拾ったメスを握り直す。
「我輩、オリジナルになりたいであります。お前の大切な『モノ』が欲しいんであります」
それがなんなのか、よく分からないけど。
「変われよ、だから」
そうしなければ、ならない気がした。
「嫌であります」
「それは残念」
我輩が飛びかかったのは次の瞬間だった。

気が付くと、青い手に抑え込まれていた。
記憶が、こいつも我輩のモノだと叫ぶ。
あ、我輩が赤いのを斬った。
痛そうだ。眼球まで斬られたかも知れない。
だけど、赤いのは平然とした顔をして言った。
「『自分』を殺そうとするな。馬鹿者」

あ。
「そんな仕事俺たちが引き受ける。だからお前は見るな。いつものお前でいろ。俺たちはお前を守る。何があっても。だから頼れ」
羨ましいな。
あれが、我輩のモノになるはずだったんだ。

※※※※

ぶくぶくと、培養液に泡が流れる。
我輩は還元されてゴミになるんだって、聞いた。
「お前もよぉ、暴れなきゃオリジナルに成り変われたかもしんねぇのにな」
呆れかえった、声がした。
「あ、黄色」
「黄色じゃねぇ……ったく」
黄色は、くくと笑うとボタンに手を掛けた。
「最後に言い残す事は？」
「オリジナルに、伝えて……」
喋りにくいな、コレ。
「我輩は、お前が嫌いだって」
いいよな。
オリジナルは。
ぜんぶ持ってて。
だから嫌いだ。
「そうかよ……」
黄色はまた、笑った。
「じゃあな」
それが、最期に見たモノだった。

To be continued

CHAPTER：1　始まりと予感

国立能力者研究所、というシンプルながらもなかなか仰々しい建物の門をくぐる少女がいた。
幼いというカテゴリーに相応しい顔に不釣り合いな鋭い瞳が周囲を睥睨する。短い髪が風になびいた。
鮮血を思わせる赤い髪と瞳はよくも悪くも人目を引く。もう、5月になるというのに重苦しく感じる黒コートが、少女をより奇異に見せていた。
印象は鮮烈といった所か。
少女はなれた手つきでドアを開けると、広いエントランスホールからエレベーターに乗った。
目的地は5階、廊下の突き当たりの部屋だ。
ノックをした少女は、おもむろに口を開いた。
「ラインハルド博士、来ましたよ」
落ち着いたアルトが響く。
「おお、来たか来たか……ってえらく不機嫌だの、弥々華ちゃん」
老眼鏡を掛けた白髪の男、ラインハルドは苦笑した。
一方、弥々華と呼ばれた少女はため息を吐き出す。
「どうもこうもありませんよ。書類が多くて、たまったもんじゃないし……」
弥々華は乱雑に椅子に腰掛けると、上目使いでラインハルドを見た。
「んで、診察の時間忘れてすいませんでした」
「分かってくれて助かるわい。で、調子はどうかの？」
「それはあたしのですか？　それとも『全能深化』の？」
弥々華は顔を上げた。
全能深化。
弥々華がアリシアと化した直後に、アリシアから譲り受けた能力とされているものだ。

最もそれが事実なのか分からず、また能力を2つ持った能力者が歴史上初めて見つかったせいもあり、弥々華はこの施設に週に1度通う羽目になっていた。
「両方じゃよ」
ラインハルドは茶目っ気たっぷりに笑うと弥々華の脈を取る。
「脈拍正常、無理はしとらんな？」
「一応は。戦闘時はそんな事考えられませんし」
弥々華は素っ気なく言うと、離された腕を伸ばす。
「能力を2つ使って体に負担がかかる可能性だってある。無理は禁物、気を付けてな」
「分かってます」
ラインハルドは相変わらずの弥々華の頬を、緩やかに撫でた。
「いい子だ」
「博士、子供扱いしないで下さい。もう18ですよ」
「これは失礼したの」
ラインハルドは柔らかく笑った。
「では今日はもういいから。来週、忘れずに来てね。あ、お昼まだだったら一緒にどうかの？」
「すみません、今日用事あるんで。また誘ってくださぁい」
弥々華は少しかわいこぶった返答を返すと、小さく笑った。

※※※※

世界は、変わる。
小型の宇宙艇にケロロ小隊は揃っていた。
ワープ中であるが故か、外の景色は皆無。ケロロはそんな窓に背を向けながら、1人呟いた。
「それにしても、本部も分からないよねぇ。いきなり一時帰投しろ、

なんてさ」
ガンプラを組みながら、ケロロはゲロリと呻く。
数日前、ケロロ小隊にケロン軍から命令が下ったのだ。ケロロ小隊は一時帰投し、戦闘訓練を受けるように、と。
ケロロは慌てて拒否したものの、命令と言う事もあり今に至る。
「それは貴様のせいだろうが」
武器を磨くギロロが上げた呆れかえったような声に、ケロロは小さく抗議した。
「だって侵略遅延のペナルティに戦闘訓練なんて帰投しなくてもいいじゃん」
確かにそうなのだ。
満足な戦闘訓練なんて、地球で事足りる。
「本部は我輩達に何をさせたいんでありますかねぇ……」
非常にかったるそうに唸ったケロロを、ドロロはまぁまぁと宥めた。
タママは我関せずと言った調子で菓子をぱくついている。
「ん？　どうした、クルル」
そんな時だった。少し離れた場所でノートＰＣをいじっていたクルルは、うん？　と顔を上げた。ＰＣのウィンドウにはなにやら小難しい書類が映し出されている。
「いや、ちょっとな」
その言葉にギロロは怪訝な顔を向ける。
「そうか……ならいいが」
きな臭い、匂いがする。
そんな予感がした。

※※※※

「お、ティト」

グランドスター内に作られたＡｐｄｓｃｏの施設である、空間転移室。その前で腕を組む男に、弥々華は気安く声を掛けた。
見慣れた青い三白眼がこちらを睨む。
「やっと来たか、どのくらい待たせりゃ気が済むんだよ」
「別に待っててなんて言ってないけど？」
「命令されりゃ、待たざるをえねぇだろ」
「それは知らんわ」
軽口の応酬を交え、２人は歩き出した。広い廊下の人通りは皆無。
「戦闘訓練だって？」
「うん、侵略遅延のペナルティだって」
平然と言い放った弥々華に、ティトはうわぁと声を上げる。自分の隊とは大違いだ。
「よく平然としてられるな」
「これが当たり前だからね」
「ペナルティか。だから変わったのか……」
１人ごちたティトに、弥々華はひたすら怪訝な顔を向けた。
「変わったって何が？」
「いや……その訓練元々オレ達が担当するはずだったんだが」
「あぁ」
弥々華は腑に落ちた、と言うような顔でティトを見た。
「元々ガルル小隊がやるんだったんだ、なるほど。あ、ここ？」
人通りが出て来た廊下で、弥々華は立ち止まった。
「あぁ、つうかお前こっちの言葉読めたんだ」
会議室らしい部屋にはケロン星の言葉で、ケロロ小隊待機室と書かれている。
「まぁ、隊長の書類整理手伝ってたら自分の小隊くらいはね」
そう言いつつ、弥々華はポケットに手を突っ込んだ。取り出したのは白と黒を組み合わせたクロス、弥々華の階級章だ。
「じゃ、死ぬなよ」
ドアに階級章を認識させている弥々華に向かい、ティトは手を振っ

た。どうやら命令とやらはここまでらしい。
「おー、じゃあね」
弥々華は手を振ると、ドアが開いた。
「あ、みんなお揃いで」
敷居を跨いだ弥々華は、丸い机で顔を突き合わせるケロロ小隊を見ると声を上げた。
「遅いぞ」
「一応まっすぐ来たんだけどなぁ」
ギロロにせっつかれるまま、弥々華は手近な椅子に腰を掛けた。全員が書類を手にしているのを見て、机に積まれた紙を手に取る。
「――つーわけで、まぁ適当にやるであります。正直、楽勝っしょ？」
弥々華はその言葉に慌てて書類に目を通す。
なるほどバーチャル訓練で時間一杯持ちこたえれば言いわけねと理解した。
時間は1時間、まぁなんとかなる時間だ。縛りも無いしと頷く。
「もちろんですよ、軍曹さん！」
タママがえっへんと胸を張ったのが見える。
「どっちかって言えば、お偉いさんに渡すデータ取りの為みたいだから適当に終わらすであります」
ね、と笑うケロロにギロロがため息を吐き出した。
ある意味いつもの光景に、弥々華とクルルは苦笑した。

※※※※

「おやまぁ、驚いた」
薄暗い、薄緑の液体で満たされた水槽が沢山置かれた部屋の片隅で、薄紫の男が声を上げた。

「こんなに上手く行くとはねぇ……」
男が見ているモニターには、やいのやいのと騒いでいるケロロ小隊の姿が映し出されている。男はゆっくりと手を伸ばすと、モニターに触れた。
「憎いよ、君が憎くて堪らない……」
男の言葉尻には僅かな狂気と苛立ちが含まれていた。
「ねぇ、クルル元少佐？」
男の手のひらに黄色が触れた瞬間、男はそれを握り潰すような所作を見せる。
「そして……君もだよ。被験体Ｋ－６６。君も同罪だ」
次はモニターの緑に触れ握り潰す。
「小生をこんな所に追いやった罪は重いよ」
男の目が光を受けて、揺れる。
「さぁ復讐だ」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

CHAPTER：2　嗤う男

空気が悲鳴を上げる。その表現が相応しいだろう。
硝煙の匂いの中、血液が飛び散った。
「あ、がぁ？」
自分でいうのもなんだがエグいな……と、弥々華は目を細めた。設定された敵はケロン人型、その見てくれに少なくとも弥々華は閉口せずを得なかった。
足元に展開されたローラーに弥々華はブレーキを掛ける。
「風華招来」
日本刀を模した能力である黒白風華を捻るようにして、衝撃波を放った。
妙にリアルにアスファルトに飛び散った血。気持ちの良い物では無かった。

※※※※

手榴弾のピンを口で引き抜くと、投げる。駆け出した背中を追いかける悲鳴を無視し、ギロロは目の前に銃を構えた。
「邪魔だ！！」
将棋倒しに倒れたそれを飛び越えたギロロは、更に銃を背後に撃った。
良く知った顔が見えた気がしたが、気のせいだと片付ける。
「なぜ終わらん……」
1時間、という時間はとうに過ぎた気がする。だが、敵は無尽蔵に湧き出し、牙を剥く。
撃ち出された銃弾をかわすと、ギロロは溜め息を漏らした。

※※※※

「クルル」
ケロロは背後の敵を至極面倒臭そうに撃ち抜くと、不意に口を開いた。
「今回の戦闘訓練、おかしくないでありますか？」
その言葉に、クルルはレンズの向こうの目を細めた。視線の先のディスプレイの半分には、散ったケロロ小隊が敵を殲滅する映像が映し出されていた。
「同朋のデータなんて珍しいでありますよ。あと、敵が多すぎるし」
ほぼ中隊編成と変わらないんじゃない？　とケロロは続けた。
「何より、終わらないんでありますよ」
ケロロはそう言うといつの間にか取り出したナイフを放る。
「それに……1時間、立ったでしょ？」
ディスプレイのもう半分、暗号にも似た言語が並んだ方を見ていたクルルは、頷いた。
「呼び出しといて、ふざけたもんだぜ？　こんなぶっ壊れたプログラム使わせるなんてよ」
クルルは指を走らせながら、笑う。
「見覚えあるな」
「何がでありますか？」
「なんでもねぇよ。それより全員集めていいか？　プログラム強制終了させっから。直すよりそっちの方が早ェ」
ケロロはうん、と頷いた。
「早い所、終わらせようであります。我輩もうイヤ」

※※※※

苦い味がした。
タママは息を飲むと握り締めた拳を敵にぶつけ、距離を取った。
「タママインパクト！！」
人が吹き飛ぶ。
今までの鍛錬が身を結んだという優越感と、正反対の感情が胸を満たす。ドロドロと相反する感情が混ざり合いながらも、タママは敵を見下すように笑って見せた。
多分人格は裏なんだろうと、自分で理解出来る。
その時だった。
【ケロロ小隊！　一端ベースに集合するであります！！】
その言葉に、タママはあーあと声を漏らした。
「はーい、了解ですぅ」
人格を戻しながらタママは通信機に返事を返す。さらに接近してきた敵に回し蹴りを当てると、タママは駆け出した。

※※※※

青い閃光がケロロの前に降り立ったのは収集から数秒後の事だった。
「隊長殿」
「敵は減ってるでありますか？」
ケロロの声に、ドロロは否と首を振った。
「1時間を過ぎた辺りから敵兵の補充が、元々の数を上回っていたでござる」
「やっぱりでありますかぁ……」
ボリボリと頭を掻いたケロロにドロロは肯いてみせた。

その時だった。
「軍曹さぁん！！」
「隊長！！」
比較的近くで戦っていたタママと、歩術で現れた弥々華がケロロの名を呼んだ。
「いきなり召集ってどういう事ですか？」
「斬っても斬っても終わらないし、意味分かんないよ！」
最若年コンビの質問と悲鳴に、ケロロは頭を掻いた手を止めた。
「後で説明するから、ちょっと待ってて欲しいであります」
返り血塗れの弥々華を見ないようにして、ケロロは2人を落ち着かせた。取り扱い弥々華を見るのは怖いのだ。色んな意味で。
そう言ってケロロはふうと息を吐き出した。その時だった。
「おい、ケロロ！！」
現れたのはギロロだった。
「このシステムはどうなってる？」
「あーちょっと待ってて。クルル？」
ケロロは突如現れた赤にびっくりしながらも、クルルに目配せして見せた。
「んじゃ、デリートな」
ｄｅｌｅｔｅ、と掛かれたキーをクルルはカタンと押した。次の瞬間景色がぐらりとブレる。
「うわ……」
弥々華が小さく呻いて、目を閉じたのが分かった。景色が目まぐるしく回り、周囲に放電が始まる。次の瞬間、シュミレートシステムは消えた。
「ケロロ？」
「システムが壊れてたらしくてね、バランスも時間もぐっちゃぐちゃになってたんでありますよ。記録は残ってるから、大丈夫なんでありますが」
ケロロは淡々と事実を口にすると、弥々華を見た。血液もバーチャ

ルだったため、返り血は消えていた。
「大丈夫でありますか？」
「いや、目眩しただけ」
弥々華はそう言いながら、踵を打ちつけた。ローラーが格納される。
白く戻った部屋を弥々華は見回した。その時だった。
ウィンと軽い音を立てて、ドアが開いた。
「おやおや、驚いたねぇ。そこから強制終了させるとは」
不意打ち気味に軽くやる気の無い拍手の音を響かせて現れたのは、
珍しく白衣を纏った薄紫のケロン人だった。
男は不愉快だと思わせるような高慢な笑みを貼り付けたまま、ケロ
ロ小隊を見やる。
「久しぶりだねぇ、クルル元少佐。相変わらずのようで安心したよ」
男は黒い軍帽――ケロロ達のものとは違い、地球の警察官に似た物
――のつばを握り、掛けていたメガネにくっつけると、くっと笑い
声を上げた。
「久し振り、と言うべきだなぁ。サティティ中佐」
クルルの声の、温度が下がる。
サティティも大きなアイスブルーの目をゆっくりと細めた。
「でよ、なんで佐官ともあろうアンタがこんな下士官小隊の訓練な
んか見に来るんだ？」
条件反射で敬礼するケロロ小隊の残りの面々にサティティは目をや
った。
「ご挨拶だよ。たかだかF級の下士官の寄せ集めとはいえ、君が折
角来たんだからね」
その瞬間、弥々華の背中に気持ち悪い感覚が這い上がる。自分にで
は無く、ケロロに向けられた視線に、だ。
メガネのレンズ越しに感じた、人では無く物を見るような視線に、
弥々華は吐き気すら催した。
「君もこんな奴らと連んでいないで、戻って来ればいいのに」
サティティはその視線の冷たさを消すと、クルルに向き直る。

「それでは小生は研究に戻るとしようかな。今は合成獣の研究をしてるんだ。いわゆる動植物と様々な物質の融合でね。以前あった研究データを元にしてるがなかなか愉しいよ。あぁ、失礼クルル元少佐。また君と研究出来る日を楽しみにしているよ？」
長台詞を吐き捨てたサティティは、くるりと踵を返した。
「では、また明日」

※※※※

「意味分かんないし！　なんなのさ、アイツ！！」
「落ち着くでありますよ、弥々華殿！」
時間は流れ、食堂である。取りあえず仕事終わりと言うことで昼食を取る事になったケロロ小隊は、机に向き合い皿をつついていた。
「あまり癇癪を起こすな」
「だってさぁ、普通に見下してるじゃん！　あたし達の事」
あの不遜なサティティの態度があまりにも気に食わなかったのか、弥々華は膨れっ面で箸を振る。
「弥々華殿、あのような人物はこのような場所では珍しくは無いでござるよ」
ドロロに説き伏せられた弥々華は、小さく唸ると箸を置いた。
「ん……うん」
「で、これからみんなはどうするんでありますか？　明日の夕方のデータ解析が終わるまでは帰れないでありますし。我輩1回家帰るけど」
「俺も戻るぞ」
「拙者も――」
「あ、僕もですぅ」
ケロロの言葉に、3人がガヤガヤと口を開いた。

「クルルと弥々華殿は？」
「官舎にいるぜ。やる事があるんでなぁ」
「あたし、官舎に部屋無いしなぁ。あ、ティトに泊めてもらうよ」
カレーを食べていたクルルと、爪楊枝をくわえた弥々華はあっさりと返事を返した。
「じゃ、明日の夕方まで自由行動でいいでありますな」
ケロロはそう言って箸を置いた。

※※※※

サティティは人気の無い廊下を、忙しない足取りで歩いていたた。
そして、自らの専用ラボにたどり着くと足を止める。専用ラボは佐官以上に与えられた、誰にも干渉されない研究室だ。
「キララ！」
サティティが張り上げた声は、神経質に苛立った物だった。
その声に、オタマのケロン人が顔を覗かせる。全身、真っ白で瞳はアイスブルー。幼い顔はわずかな恐怖に歪んでいた。
「はい、お父さま」
「被検体Ｋ－６６－３１２はどうなった？」
サティティの声にキララは背筋を伸ばす。
「はい、ひけんたいＫ－６６－３１２はオタマまでせい長しました。せい体になるまでにはあしたの朝までかかります」
「そうか」
サティティは唸るとキララを一瞥だにせず、大きく広がるディスプレイを眺めた。
「さぁ、復讐を始めようか？」
そこに映し出された黄色と緑に向かい、サティティは声を上げて嗤った。

To be continued

CHAPTER：3　そして始まる喜劇と悲劇

ケロン軍本部・グランドスター。
黒いシルエットをかたどるケロン人の男、大佐――ケロン軍本部最高司令官――は目の前の男を凝視した。
「……本気かね？」
「当たり前であります。『我輩』を処理した罪は、重いでありますから」
大佐は、ゆっくりと息を吐き出した。
「私1人では済まないのか？」
「我輩が償わせたいのは、貴様だけではない。我輩を生み出した世界全てでありますから」
大佐は男が突きつける銃口を、ただ眺めた。
「だけどまずは、貴様からであります。司令官殿」

※※※※

「……？」
目を開けると見慣れない天井だった。僅かに黄ばんだ、白い天井。
「ん……」
弥々華は首もとまで毛布を引っ張る。脳が徐々に覚醒していく。
「くぁ……朝……」
そうだ、ここはティトの部屋だ。少しずつ記憶が戻る。
昨日、小隊の面々と別れた弥々華は、ギロロの背を追い掛けて帰宅したガルルのせいで仕事にならないとボヤいたティトとタルルとトロロとで、トランプをしたのだ。
そして夜、ティトの部屋に転がり込んで毛布を1枚奪い取りソファ

ーにダイブ。
無理やり寝床を確保した所までは思い出せた。
官舎はそれなりに広く、明るい。
弥々華は何気なく起き上がり、テレビを付けた。
「よぉ」
背後に向かって、弥々華は首を伸ばした。その瞬間、頭に鈍い衝撃が走る。
「痛った！！」
拳を振り下ろしたティトは、とうとう昨夜から我慢していた溜め息を吐き出した。
「男の部屋に上がり込んで寝んじゃねえ！！　何回目だと思ってるんだ馬鹿がぁっ！」
「ティトだったら良いじゃん！」
「良くねぇよアホ！！」
反省の色の無い弥々華に、ティトはフルスイングで持っていた缶を投げつけた。
「痛てっ！！」
弥々華の顔面にぶつかり空中へバウンドした缶を、それでも器用に受け止める。
「飲んだら出てけよ」
「はーい」
ありがたい事に、それは地球製の缶紅茶だった。プルタブを開け、やっていたニュースを眺める。
当たり障りの無いような映像に退屈を感じた弥々華は欠伸を漏らした、その時だった。
弥々華が缶に口を付けたのと同時に、画面が切り替わる。
「え……！？」
次の瞬間、弥々華はだらりと口の端から紅茶を垂らした。
「なに見てんだー……って汚ェ！！　拭けよさっさと！」
自分用のコーヒーを持ったティトの悲鳴にも耳を貸さず、弥々華は

左手をゆっくりと持ち上げる。
「ティト、テレビ……」
「テレビがどう……し……」
苛立ったティトの声は行き場を失ったように、消える。
「なんだよ、お前。壊したか？」
「なにもしてないけど」
リモコンをいじっても、テレビのスイッチを押しても、画面はブラックアウトを続けていた。

※※※※

「えー……我輩、なんもしてないんでありますが……」
ケロロは男の背後を覗き込み、そっと外を窺った。母親に叩き起こされた、と思ったらこれだ。
外には小型軍用機が何台も止まっており、厳戒態勢の状況。自分を問い詰める軍人の目は厳しい。
「ケロロ軍曹、抵抗を止め、直ちにご同行願う。これはケロン軍からの通達だ」
「だから何にもしてないのに、犯人扱いされても困るんでありますよ！！」
「いいからついて来て下さい！！」
ガシリと腕を掴まれたケロロが悲鳴を上げる。
その瞬間だった。
ケロロの視界の端に、見慣れない車が見えた。
「ケロロ！！」
「ギロロ！？」
窓から顔を出す真っ赤な顔に、ケロロは素っ頓狂な声を上げた。
「伏せろ！！」

ケロロは腕を握られたまま、身を伏せた。
次の瞬間、爆音が広がる。
握られた手が緩んだのを感じ、ケロロは慌てて振り払った。そのまま駆け出す。
「こんな町中で手榴弾投げるでありますか？　普通」
熱い炎を避けると、ケロロは開け放たれた車に飛び乗った。
「ギロロ……ってガルル中尉！？」
車内にいたのはギロロとガルルの兄弟だった。
「ケロロ君、早くシートベルトを。さもないと――」
「頭打つぞ！」
窓から身を乗り出したギロロに促され、ケロロは慌ててシートベルトを締める。
「ゲロ！？」
次の瞬間、車は急発進。ケロロの体に圧力が掛かる。
凄まじい勢いで車はその場を後にした。

※※※※

「ティト曹長！　起きてるっすか？」
ノックは無し。
飛び込んできた水色に、２人は顔を見合わせた。
「タルル、どうした？」
「テレビ、壊れちゃったんす……トロロのパソコンも、軍のなんとかに繋いでたら壊れて。ティト曹長のもっすか？」
「あぁ、ご臨終」
参ったなと、ティトは頭を掻いた。同時刻にテレビが壊れるなど、あるだろうか？
「あ……あのさ、あたしクルルの部屋行ってみるね」

顔を合わせた青に、弥々華は小さく声を掛けた。ティトは備え付けの電話を取ると「通じねぇ……これもか」と呻いていた。
「行ってらっしゃいっす～」
ある意味脳天気に手を振ったタルルに手を振り返し、ドアを開けようとした。
「ん……ん？」
弥々華は首を傾げた。
「……どうした？」
「開かないんだけど」
ドアが開かない。と、言うか微動だにしない。
「は？　ちょっと貸してみろよ」
ティトは近くにあった階級章を取り出し、センサーに合わせた。
「……」
「ティト？」
数度、さらに数度。センサーに階級章を合わせる、が。
「ここも壊れた？」

※※※※

「調子はどうかな？」
不意に声を掛けられた男は、小さく眉を上げた。その表情は読めない。
「上々でありますよ？　上層部と通信部の人間は全て捕らえ、手中に収めた。後は我輩の『部下達』がやってくれるであります」
ゲロリと、男は小さく笑った。
「アンタには感謝してるであります。ケロンをぶっ壊した暁にはアンタを参謀にしてあげるでありますよ？　サティティ中佐」
その言葉に、サティティは皮肉っぽく口角を上げた。

「小生よりも適任がいるだろう？　オリジナルの部下が」
その言葉に男は拳を固く握り締めた。その顔には、初めて表情らしいものが浮かぶ。
「オリジナル……」
その表情は、怒りだった。
暗い闇のような黒い瞳が、深さを増す。
「まぁ、いいさ。作戦の成功を願う、スポンサーの座を降りるつもりは無いからね。安心したまえ、ケロロ」
黄緑色の体が、ぴくりと動いた。ケロンスターも、階級章も無い『ケロロ』は、ちらりとサティティを見た。サティティはこちらに背を向け、愉しげにモニターを眺めている。
「安心もクソも無いでありますよ。狸め」
低く吐かれた悪態に、気付くものなどいなかった。

To be continued

CHAPTER：4　復讐者は動き出す

「我輩にもなにがなんだかなんでありますけどぉ、何があったでありますか！？」
凄まじい勢いで飛ばすエンジンに負けない様に、ケロロは必死に怒鳴った。
角を曲がった車は、そこでやっと止まった。
「撒いたか？」
「だろうな……」
後ろを振り返った兄弟に、ケロロは頬を膨らます。
「話聞けであります」
「話なら聞いてるぞ……とりあえずドロロとタママを拾ったら説明する」
「プルル看護長も帰宅しているはずだ。途中で乗せていく」
その言葉に、ケロロは背もたれにもたれかかる。
「了解であります」
今は口論しても、無駄だろうから。

※※※※

「「「せーの……っ！！」」」
２つの青と１つの赤が声を合わせる。ぐっと指先に力を込めて、力任せにドアを引いた。
数秒後、指先がみしりと不吉な音を鳴らす。
「ってぇ……」
「……開かないっすね」
「やっぱりぶった斬った方が速いんじゃない？」

指先を振り痛みを逃がそうとするティトは、今にも黒白風華を抜こうとする弥々華を睨んだ。
「修理代誰が払うと思って……タルル！　お前もやらなくていいから！！」
ティトは目から光線を放とうとしたタルルを制すると、勘弁しろと頭を抱えた。
「……しょうがない、もう1回試してみますか？」
「そっすね」
2人はまた指先を掛けると、弥々華だけ振り返る。
「ティト！　手伝って」
「言われなくても分かってる」
ティトも指先を掛けると今度は弥々華が1人、合図した。
「せぇっ――！？」
その瞬間、指先に掛かる抵抗が消え失せた。
「痛っつー」
勢いよく尻餅を付いた弥々華は、へたり込んだまま上を見上げた。
「ドアが……」
ドアがあった空間は斜めに切り取られ、廊下の明かりが覗く。ティトはあぁと声を上げると、そのまま倒れ込んだ。
「あ！！」
その時だった。弥々華は思わず、ドアの向こうに見えた灰色の人影に声を上げた。
「あー、えっと……」
その影には嫌という程見覚えがあったのだが、名前が出て来ない。
「……あー！　イライラするなぁ、誰だっけアンタ」
「ゾルル兵長っすよ。弥々華曹長」
「あぁ！！」
弥々華はポンと手を打った。
「ティトのとこのアサシンか！　でもなんでこんな所に？」
「俺が寄越したんだぜぇ、感謝しなぁ」

その声に、弥々華は体を起こすとドアの残骸から身を乗り出した。
「あ、クルル」
廊下の角を曲がったクルルは緩い笑みを浮かべ、立ち止まった。後ろには今にも泣き出しそうなトロロを控えさせていた。
「あ、じゃねぇよ。なにがあったか知らねぇのか？」
その顔に、ティトの部屋の３人は呆けた顔をした。
「は？」

※※※※

それから数分後。何が起きたか理解しかねているタママとドロロ、プルルを拾い、グランドスターを目指していた。
誰もいない道路をぶっ飛ばしつつ、ケロロはチラッと外を見た。
「信号、止まってるでありますな」
「信号だけではない」
ガルルの固い口調に、ケロロの背が伸びる。
「インフラの殆どが全滅している。まともに動いているのは上下水道くらいか」
「……でも、なんでそんな事になってるでありますか？」
ギロロははぁとため息を漏らした。
「水道除いたインフラの管理は軍でやってる、と小訓練所で習っただろうが」
「つまり、軍の設備がダメになっちゃったって事ですか？」
ガルルは首を振る。
「その可能性は低いだろう。恐らく――」

※※※※

「この事件、人為的に引き起こされた物だぜぇ」
その言葉に、何を考えているのか分からないアサシン以外の４人は顔を見合わせた。
クルルと弥々華、トロロ・タルル・ティト・ゾルルの４人は官舎を出てグランドスターとの連絡船が発着するサウス☆スター宇宙港へと向かっていた。
官舎とは言えグランドスターに併設されている訳では無いのだ。
「えっと、つまり誰かがわざとやらかしたって事？」
「そうだ。グランドスターの設備さえ使いこなせりゃ、母星すら乗っ取れる。それを誰かがやらかしたって事だな」
その瞬間、弥々華の背に冷たい物が駆け上がった。
「そんな事が、可能なんですか？」
「余程の人数と機材がねぇと無理だろうがな」
クルルの言葉に、全員が黙り込む。こんな事件、ケロン星でも初めてでは無いだろうか？
「着いたぜぇ」
その時、不意にクルルは立ち止まった。宇宙港のドアは固く閉ざされているように見える。
「開いてるかな？」
「開いてたとしても、罠だと思ウ」
トロロの言葉を聞いた弥々華は、静かに身構えた。
「なら、これからどうすればいいわけ？」
「宇宙船を使うっきゃねぇだろ」
「だったら格納庫ですね」
ティトにクルルはゆるりと頷いた。
その時だった。
静まり返ったそこに、小さな音が響く。
「……罠だろ、これ」

宇宙港のドアは、確かに開いていた。

※※※※

「そう、分かったであります」
ケロロは、小さな無線機に頷き掛けた。
グランドスターは、かつて無い程に静まり返っていた。
「サティティ中佐」
いまだにモニターを見詰め続けるサティティに、ケロロは手を伸ばす。
「なにかな？」
「ここの、全ての人員の移動が終了したであります。逆らう者は、いなかったと」
「そう。後で始末しておくよ」
サティティはケロロを一瞥もせず応対する。
ケロロは小さなため息を漏らした。
「こんな事で、本当にオリジナルを呼び出せるのでありますか？」
その瞬間、ようやくサティティはケロロを見た。
「あぁ。ほら、もう動き出している」
サティティが指差したのは、モニターだった。
緑色の円が、地図として描かれた道路を進んでいく。
「あと、いいお知らせがあるよ」
サティティはモニターを切り替えた。
「君を還元した男が、宇宙港にたどり着いたよ」
ケロロの表情は、面白いように変わった。静かな余裕が抜け落ちるように、表情は寂しげなそれに変わる。
「黄色が？」
「あぁ」

サティティはゆったりと頷いた。
「直にオリジナルも、その部下達もたどり着くだろうね」
ケロロの表情は寂しげなそれから、更に驚きへと変わる。
「我輩、サティティ中佐を見くびってたでありますよ」
ケロロは静かに踵を返した。
「行ってくるであります」
「オリジナルと少佐は殺すなよ」
掛けられた声にケロロは頷いた。
「了解であります」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

CHAPTER：5 run and fight.

宇宙艇、小型の椅子にケロロは静かに身を沈めた。
操縦桿を握ると僅かな重力と共に、離陸する。
「あ……」
操縦桿の冷たさ。重力が体を沈める感覚。乗り物独特の匂い。僅かに冷たい空気。そして、確固たる自分が決めた目的。
ケロロにはそれら全てが、初めての感覚だった。
「これが、自由」
自分の意志が、行動を支配する。自分が、やりたい事をする。
「自由、であります！！」
今までの行動が憎しみに駆られた行動である事を忘れ、言葉を噛み締める。今まで何があっても手に入れられないと、思っていたもの。それが、ここにある。その時ケロロの心に新たな恐怖が芽生えた。
「無くしたくない」
オリジナルの顔が、頭に浮かぶ。
「我輩は……」

※※※※

いつもは人でごった返す宇宙港は、真っ暗な空間に変わっていた。
人気は皆無。冷え冷えとした空間に寒気が走る。
弥々華は黒白風華を発動すると、小さく構えた。隣ではティトが龍炎翔苛を発動。ぼんやりとした人魂が、周囲を照らす。
全員が口を閉ざすような重苦しい緊張感が、周囲を満たしていた。
「あんまり引っ付かないでよ。斬れるよ……」
小さく弥々華が呻くと、足元にしがみついていたトロロが黙って離

れた。
薄青い炎がちらりと揺らめいた、刹那だった。
「――ッ！！」
頬に熱い何かがかする。
弥々華は黙って右手を頬に押し当てた。
ぬるりとした感触。
瞬間、弥々華は叫んでいた。
「伏せて！！」
弥々華はとっさ手を伸ばし、クルルとトロロの頭を抑えつけ、伏せた。
次の瞬間雨のような銃声が、周囲を満たしていた。

※※※※

にぃっとサティティの表情が歪んだのは、ケロロが消えた直後だった。
「待ち焦がれたよ、この時を」
背筋を伸ばすと、サティティはゆっくりと周囲を見渡した。
部屋の壁を覆うように置かれた水槽には、僅かに蠢く影がある。
「やっと、抜け出せる……この辛酸を舐め続けた日々からね」
サティティは腰を曲げると、低い笑い声を漏らす。それは歪みきり、何事にも救われない狂気を秘めた声だった。

※※※※

「遅イ」

弥々華がゆっくりと顔を上げると、姿無き狙撃者達は地に伏せていた。
「流石……」
ティトの声に、弥々華はようやく現実を認識した。ゾルルがやったのだ。
「なんだったの？　今の」
弥々華は2人から手を離すと、恐る恐る顔を上げた。視界はほぼ皆無だ。
「油断するな、弥々華」
「分かってる」
半ば無意識に、2人は背中を合わせる。その瞬間だった。
「「「「「「――ッ！？」」」」」」
6人の視界が、真っ白い光に塗り込められた。
「眩しっす！？」
「見えな……！？」
思わず、全員の注意が削げる。
突如付けられた照明。それに合わせて走り込んで来たのは、たくさんのケロン人だった。
「な……！？　なんで？」
ようやく状況を見た弥々華が、小さな悲鳴を上げる。
「こイツら……軍人……か」
「間違いなさそうだネェ」
2人の言葉に、弥々華がうっと息を飲む。
「あたし達、なんかした？」
「言ってる場合かよ？」
「とにかく、クルル曹長とトロロ連れて逃げろ！」
ティトは叫ぶとトロロをひっつかみ、弥々華に押し付けた。
「了解……死ぬなよ」
弥々華はトロロを受け取りクルルを掴むと、全力で走り出した。

※※※※

「いいか！　何がなんでも殺すな」
「了解っす！！」
タルルは頷くと、勢い良く駆け出した。
「うぉりゃあっ！！」
膝を曲げ、跳躍。右足を突き出し、蹴りを食らわせる。
着地、さらに空中に舞い上がる。
「タルルジェノサイドＥＸ！！」
舞い散る光の破片。昏倒していったと思われる兵を横目に、ティトは龍炎翔苛を拡散させた。熱波が、まだ顔を上げている兵を打ち据える。
その周りではゾルルが、音を立てず走り１人、また一人と気絶させていく。
だが。
「こイツら……斬ッて……も斬……っテモ」
「クソ、キリが――」
「ティト曹長！！」
次の瞬間、ティトの頬に熱が走り小さく息を飲む。
「なんでもない、集中してろ！！」
「了解っす！」
斬り伏せ、打ち据え、殴り倒す。
ひたすらそれを続けてもなお、兵は減る事を知らない。
ティトは悔しげに、舌打ちを吐き出した。
その時だった。
「そこまでであります」

※※※※

弥々華は壁に背を付けると、小さく息を漏らした。
「大丈夫？」
「まぁね」
弥々華はへらと笑うと、周りを見回した。そこは決して小さくは無い格納庫だった。比較的小型と思われる宇宙艇が整然と並んでいる。
「おい、ガキども」
クルルに1絡(から)げにされた2人は思わず顔を見合わせた。
「ガキって言うナ、陰険メガネ！！」
「弥々華、そいつ置いてけ」
「それはひどいって」
はぁとため息を吐き出した弥々華は、トロロを掴むと、宇宙艇に飛び乗った。
「すぐに出るの？」
弥々華は操縦席に付き、なにやら操作を続けるクルルの背に声を掛けた。
「あぁ、誰かしら運転出来るだろ？」
それもそうだ、と弥々華は頷き椅子に腰掛ける。
次の瞬間、抵抗とともに宇宙艇は発進した。

※※※※

「そこまでであります」
次の瞬間、3人の足が無意識に止まる。その声は、弥々華の所の隊長の物だとティトには理解出来た。だが、その声には高圧的で、全てを支配するような重みがある。

ティトはゆっくりと振り返った。
「――ッ！？」
時間が、止まったような気がした。そこにいたのは、確かに『ケロロ軍曹』その人だった。
だが、ケロンスターを持たず、無表情で信じがたいなにかを漂わせるその人物は、ティトの中に少しばかり記憶を残しているケロロではない。
「貴様……」
隣でゾルルが静かに殺気を吹き出す。
「……誰でありますかな？　君達は」
ケロロが出したのは、ひどく穏やかな声だった。
「ふざケ――」
「止めてくれよ！！」
絞り出すような怒鳴り声に、ゾルルはちらりとティトを見た。
「……ケロロ軍曹。あなたは、どちらの味方ですか？」
妙に、冷静な声が出た。
嫌な予感がする。
「敵でありましょう。多分、でありますが」
ティトの額に嫌な汗がどっと噴き出した。ケロロは表情を変えず、こちらにどこからか取り出したビームサーベルを向けた。
「伏せろ！！」
次の瞬間、現実が音を立てて戻ってきた。ティトは2人の頭をかばい、身を伏せる。
火薬の匂い。
駆け込む足音に、ティトは背後を見据えた。
「「隊長！！」」
図らずもタルルと言葉が被る。
紫が、こちらに駆け寄る。
「タルル一等兵、ゾルル兵長、ティト曹長。無事か？」
「なんとか、ですよ」

ティトはようやく表情を緩めると、立ち上がった。
ガルルの後ろには、プルルとケロロ小隊――クルルと弥々華を除いた――がいる。
その時だった。
「……オリジナル」
ケロンスターを持たないケロロの冷たい声が、響き渡った。

To be continued

CHAPTER：6　造られた命

「オリジナル……」
ビームサーベルを突きつけたケロロ――この場合、本物のケロロではない――は予備動作をすることすらなく、駆け出した。ビームサーベルを水平に寝かせると、体を前屈させる。
その視線にケロロを捕らえると、もう1人のケロロは叫ぶ。
「我輩は――！！」
あまりにも突然の出来事に、全員が動けなかった。
ケロロの腕をビームサーベルが、抉る。
そのあまりにも突飛過ぎる行動に、全員が凍りついた。
そんな中もう1人のケロロは、赤く咲いた血華に暗く笑った。

※※※※

グランドスターの薄明るい格納庫を、宇宙艇はゆっくりと進んでいく。クルルは黙って、前だけを見つめていた。
「クルル」
弥々華は窓の外に予断無く目を走らせながら、口を開いた。
「これから、どうすればいいの？」
「まずはこの星の指揮権を取り返さなきゃなぁ。お前は軍の連中がどうなってるか、見てこい」
「了解」
「ガキは隊長達が来るまでここで待ってろよ。いいな」
「……分かったヨ」
不承不承と言った様子でトロロは小さく頷いた。本当なら、自分も行きたいが……。

「着いたぜぇ」
宇宙艇は格納庫の突き当たり、目に付きにくい場所に音もなく滑り込んだ。
「さて……行動開始だ」

※※※※

ケロロの体が崩れ落ちるのを見て、誰かが悲鳴を上げた。
「よくも……よくも軍曹さんを！？」
タママは無意識に叫ぶと、駆け出そうと歩を踏み出す。
「止めろ、タママ！！」
ギロロはタママに向かって叫ぶ。だが、もうそれは手遅れだった。
「タマ……？」
軍帽に、なにかがかすった。
「止めろ」
その冷静な言葉に、タママの動きが止まる。
「これが撃たれてもいいのでありますか？」
もう1人ケロロがケロロに突きつけたのは、ギロロがよく扱うと同型の銃だった。
「軍曹さぁん！！」
「我輩は本気でありますよ？　それが嫌なら動くな、であります」
平然と、もう1人のケロロは言い放った。
「ギロロ……」
ケロロは小さく、ギロロに視線をやった。
「後は頼むであります」
それは、降参と同意義。
「了解」
ギロロはそう言って両手を上げた。

※※※※

「お父さま」
画面を眺め続けるサティティに、キララは口を開いた。狂ったように笑い続けるサティティは、笑うのを止めた。
「なんだ？　キララ」
「しんにゅう者です。き色いケロン人とぺこぽん人です」
「黄色か！」
サティティの顔が、満面に輝く。
「黄色……少佐をここへご案内して。地球人は……何者かな？」
キララは手に持っていた紙を手渡した。
「これを」
「ほぅ、ケロロ小隊の……。いいよ、彼女も連れてこい」
「はい」
キララは軽く顎を引くと、ゆっくり踵を返した。
サティティはその背中を眺め、満足げに頷いた。
「計画通りだよ。諸君」

※※※※

薄暗いを通り越し、視界がろくに聞かない廊下をクルルは進んでいた。眼鏡をスコープの代わりに使い、地図を投射している。
「ここだな……」
地図に表示された、『惑星総合操作・分室』と言う文字を見たクルルは手探りで、ドアを掴むと全身の力を使いこじ開けた。

「……くぅ」
指先が痛い。
停電対策に安堵しつつ、クルルは光を放つモニターに近寄った。ここから操作されたのは、明白だ。
ケロン本星にあるシステムの乗っ取りを防ぐために作られた設備とは言え、ここを狙われるとは想定外だったのだろう。
クルルは笑いながらコンソールに触れた。
まずは電気からだ。
次は交通関連。
頭に筋立てを組みながら、クルルは電子の海に沈んでいく。

※※※※

宇宙艇の、荷物を格納する狭いスペースにケロロは押し込められていた。
「……参ったでありますなぁ」
目的は自分だと理解し隊員とガルル小隊の命を優先させたまでは良かったが、全員があのケロン人達に見張られ、拘束状況にある。状況は悪化するばかりだ。
まぁ心配はしていないが。
それに、あそこにはいなかったクルルと弥々華、トロロの事も気に掛かる。
ケロロは乱雑に巻かれた包帯を横目に寝返りを打った時だった。
背後の扉が、音を立てて開いた。
ケロロは目を細め、そちらに視線をやる。
「立つであります」
もう1人のケロロは、銃を突きつけたままケロロを睥睨した。ケロロはだらしなく無言で立ち上がる。

腕が痛い。血が包帯を湿らせているのが、横目に見えた。
「1つ、聞きたいのでありますが」
もう1人のケロロは不意に口を開いた。
その表情はケロロからは読めない。
「なんでありますか？」
「貴様、我輩の事を覚えているでありますか？」
ケロロは無言で、口角を釣り上げた。いつもはしないような、笑みだ。
「忘れるはずが無いでありますよ……クローン」

※※※※

「うわわ……」
トロロは窓から小さく顔を除かせながら、その一部始終を眺めていた。なぜケロロが2人いるのか、なぜ片方のケロロは怪我をしているのか、なぜ自分の隊長は来ないのか。
頭の中を質問がぐるぐると回る。
「誰か戻って来てヨォ……」
トロロは悲鳴を上げると、完全にかがみ込み姿を隠す。
怖いを通り越し、手足の感覚が無くなってきた。だが、泣くわけにはいかない。
トロロはまた窓から顔を出し、周囲を伺った。今度は誰もいない。
「やるっきゃないよネェ……」
トロロはクルルが置いていったＰＣに視線を走らせた。

※※※※

弥々華はふと廊下で足を止めた。人の気配を感じる。ゆっくりと壁に背中を付けると目を閉じた。
黒白風華を発動すると、目を開ける。
廊下の角までにじりよるとそっと顔を突き出し、全力でそれを引っ込めた。
なにかいる！！
どぎまぎする心臓を抑え、黒白風華を握り直し壁から背中を離す。
そして弥々華は壁を曲がった。
黒白風華を握り様子を伺う。
「子供……？」
それは、幼いケロン人だった。弥々華はタママより下だろうと見立てを付ける。
真っ白いケロン人は闇の中ぼんやりと浮かんでいるようだった。
罠かと思うが、極端な殺意は感じられない。
「ケロン軍の子？　ま、いいや。大丈夫？」
近寄り手を差し伸べた。
その瞬間だった。
「目ひょうを、かくにん」
幼い声に、違いは無い。
だがその声は機械のように平坦で、恐ろしく冷淡だった。
「ほばくかいし」
捕縛開始？
弥々華の脳裏で言葉がそう変換される。
次の瞬間、そのケロン人は音もなく飛び上がった。
弥々華は目を見開いたが、黒白風華を構え直す。
その瞬間、ケロン人の右手が蠢いた。
「な……！？」
蠢いた右手は音もなく肥大化する。指先はほぐれ、まるでイソギンチャクのような触手を生やしていく。

グロテスクなそれが弥々華に向けられた。
黒白風華と触手が噛み合う。
金属の擦れるような音が、一瞬響いた。
「――っあ！！」
触手に絡め取られた弥々華を、ケロン人は訳もなく投げ飛ばした。
廊下をゴム鞠のように弥々華は転がる。
ケロン人は無表情で駆け出すと、距離を詰めた。弥々華はふらりと立ち上がると、黒白風華を真っ向勝負で振り下ろした。
「アンタ、何者だ？」
ギリギリと金属が噛み合う音が、廊下に響いた。
「……わたしはキララ」
キララと名乗ったケロン人は、そのアイスブルーの瞳を弥々華に向けた。
「ケロン人とキルルの、ハイブリッド……つくられたケロン人です」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

CHAPTER：7　真実の天秤

「キルル……！？」
弥々華は背筋が冷えていくのが分かった。この子供はあの恐ろしい生物兵器を組み込まれている。
勝てる、訳がない。
その感情の隙を付かれた。勢いよく腕が振り上げられ、弥々華の黒白風華が弾かれる。
「痛っ！」
尻餅を付いた弥々華に、キララは触手を突きつけた。
「おやすみなさい」
弥々華の胸部に、触手が押し当てられる。瞬間、走った感覚が弥々華の意識に作用した。
「な……」
何かを吸い取られる感覚に、指先の力が抜ける。次の瞬間、弥々華の意識は完全に途絶えた。

※※※※

「どうしたものか……」
ギロロは唸ると、周囲を見回した。ケロロ小隊とガルル小隊は、小さな倉庫に閉じ込められていた。
ドアには鍵。見張りがいて、ドアに付けられたこちらを睥睨している。
「ギロロ……話がある」
ギロロと背中を合わせるように座っていたガルルが、静かに口を開いた。

「私達が道を開けば、ケロロ小隊はグランドスターに辿り着けるか？」
その言葉は小さく耳打ちされた。
「もちろんだ」
ギロロは頷く。
「トロロ新兵を頼んだ」
そう言って、ガルルはゾルルとティトにアイコンタクトを送った。
2人は小さく、見えるかみえないかの角度で頷く。参謀不在の今、やれる事はただ1つだった。
ちりと、何かが焦げる臭いがした。
「今です！！」
ティトが叫ぶ。
その瞬間、蒼い炎は廊下に向かい爆散した。
その炎の隙間を灰色がかいくぐる。それに追従するのは、タルルとプルル。しんがりをガルルとティトが勤める。
「走れ！！」
ギロロは立ち上がって叫んだ。
ガルル小隊の背を追いかけるように、ケロロ小隊も駆け出した。
「これ以上我々の邪魔をするのであれば、貴殿らを敵と判断する」
ガルルが叫んだ事を合図にぞろぞろと湧き出すケロン人を、全員が叩き潰していく。格納庫にたどり着くまでに、そう時間は掛からなかった。

※※※※

意識が、緩やかに覚醒する。
頭が露骨に重たく、全身が怠い。弥々華はそれでも、ゆっくりと目を開いた。

「う……」
「お目覚めかな？」
聞き覚えのある声に、弥々華はのそりと周囲を見回した。視界が聞かない。
「薬物を打ったからね。あまり抵抗しないほうがいい」
うわぁ、嘘でしょ。
脳みそがそう驚いた。
「人になんつう物打ってんだ、アンタ！」
「麻酔系の薬品さ。しばらくはろくに体を動かせないだろうね」
「最悪……」
弥々華はそう言って、椅子の背もたれに頭を打ち付けた。
サティティは喉の奥で小さく笑う。
「まぁいい。それより、そろそろ来たようだね？」
その言葉に、弥々華は緩慢に首を回した。
「……クルル！！　隊長！！」
逆光で顔はよく見えないが、弥々華には2人の姿が理解出来た。後ろに控えているのは、ケロロに良く似た男とキララだ。
「弥々華殿！？　なんでここに？」
驚くケロロとは対照的に、クルルは苛立ったように笑う。
「テメェが首謀者だったとはなぁ……サティティ中佐」
クルルは一歩、静かに踏み出した。それをキララが背後から制する。
クルルは非力にも、キララに地面へと押しつけられた。
「落ち着きたまえ、クルル少佐」
「元、だ。元」
クルルは動きを止めると、サティティを見た。
「分かっているさ。あぁ、君が騒いでいるのは目的が知りたいからなのかな？　小生が何故、ケロンをここまで追い込んだのか？」
サティティは一息で言い放つと、つかつかと歩み寄る。
「顔を上げさせろ」
キララはクルルの軍帽を掴むと、引っ張る。半ばエビぞりになった

クルルの頬に、サティティは触れた。
「冥土の土産に教えてやる。君とそこの被検体への、復讐だよ」
そう言って、サティティは腕を引いた。直後、鈍い音が鳴り響く。
「「クルル！！」」
ケロロと弥々華の悲鳴が、重なった。クルルの頬に、赤みが差す。
「殺しはしないよ。クルル元少佐。君はケロン星への反逆者として、死ぬんだ。被検体は、反逆者として還元される。２人とも汚名を着せられたまま、滅びるのさ」
そう言ってサティティはクルルから離れた。
クルルは分厚いレンズの向こうから、サティティを睨む。
「ガキの頃の事……まだ引きずってやがるのか……？」
「ガキの頃！？」
ハッとサティティは息を吐き出した。
「君にとってはそうだろうね」
サティティはそう言って、クルルをまた殴った。
「だが小生がこんな所でくすぶらされているのは君が理由なのだよ。ロクなプロジェクトにも関わらせてもらえない……分かるかね？君がに小生の苦しみが」
そう言って、サティティは動きを止めた。
「……腐れ外道が」
クルルが吐いた言葉に、サティティは静かに激昂した。
「昔から変わらん口の聞き方を……！！」
ぐっとサティティは息を吐き出した。落ち着こうとしているのが分かる。
「まぁ、変わらんのは被検体の接し方もだな」
サティティは、今度はケロロに向き直った。
「実験は、まだ覚えているかな？」
つっとサティティはケロロの頬を撫でる。
「ケロンスターとの共鳴実験、実戦に置ける精神観測、クローン制作……覚えているかね。オリジナルとして架せられた使命を」

ケロロは言葉を返さない。
ただ、黙ってサティティを見ていた。
「そうか、そこの能力者は知らないのだね。隊長の素質とケロンスターを」
サティティは、今度は弥々華を見た。
弥々華はケロンスターだけは、知っていた。ケロロが何時もお腹に付けている星でその威厳によってつけている人への周囲の関心を高める力があるらしい、装備品。
だが隊長の素質は、聞いたことも無い。
「君の隊長がもっている『力』だよ。ケロンスターと合わせる事で、最高の力を発揮する。君は見た事があるかな？　君の隊長が……そうだね……何かケロン軍に関わる物をたったの一言で鎮圧する姿を……」
弥々華は、小さく息を飲む。
「知っているようだね」
サティティの眼鏡が、光を反射した。
「ケロンスターと隊長の素質。２つが共鳴しあう事で得られる力は、ケロン軍最高の権限……いや、最高完全絶対権限。全てを従わせる、権力。それが彼の持つ力。君も……いや、君達もそれに従わされているだけかも知れない。分かるかな？」
サティティは長台詞を吐き出すと、くっと笑う。
「そんな力を持った人材を、軍は放っておくはずはない。故に我々は、彼に幾つかの実験を施した。小生が責任者として。だがその結果を、だ。そこにいるクルル少佐が持ち出したのさ。そのデータを無くした責任は、小生が取った。挙げ句このザマだ」
サティティはクルルの顔に触れた。
「君が、オリジナルに情を持った所為で、な」
クルルは何も言わない。ただサティティを見ていた。
「時間まで３人を閉じ込めておけ。事が終わるまでな」

サティティの言葉に、弥々華へも手が伸びる。その時だった。
「好き勝手言って……」
今まで黙っていた弥々華はキララを静かに睨み付けた。
「実験データ取られた？　クルルが隊長に入れ込んだ？　だから星を乗っ取って濡れ衣着せる？　ふざけんなよ……アンタの好きになんか、させないから」瞳の色が、深紅から漆黒へ。
音もなく塗り変わる。
「全能深化……発動！！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

CHAPTER：8　天秤が降ろした物

サティティの顔面を殴り飛ばした弥々華は、そのまま椅子の背もたれを軸に回転した。
ケロロとクルルの頭をひっつかまえると、勢いよく引っ張る。姿を消すまでの時間、およそ3秒。
脱兎の如く逃げ出した3人を、サティティは呆けた顔で見送らざるを得なかった。
「……大丈夫でありますか？」
白衣に垂れた鼻血を拭ったサティティは、頭を振る。
「あれは、本当に地球人か……？」
「知らんでありますよ、そんなの」
互いに呆れた顔を見合わせたサティティとクローンケロロをよそに、キララは2人を追い掛ける為走り出した。

※※※※

「人気（ひとけ）が無いです……」
宇宙港での戦闘をガルル小隊に任せたケロロ小隊は、グランドスターの格納庫へ降り立っていた。
タママの言うとおり格納庫には人っ子1人いない。
だがギロロとドロロは互いに顔を見合わせると、とある宇宙挺へと歩を進めた。
「伍長さん？　兵長さん？」
「シィ……」
ギロロは唇に人差し指を当てると、宇宙挺によじ登る。
「誰かいるのか？」

銃を真っ直ぐ、ドアに向け数秒。
ギロロはドアを数度叩く。
「居たら返事を――」
その時ドアが開けられた。
「うるさいナ！！　聞こえてるヨ」
おや、とギロロは目を開く。
「あ、隊長の弟？」
「ガルルの所の通信兵か……よく無事だったな」
「まぁネ、ラクショーだったよ？　隠れてたカラ」
プププと人を小馬鹿にしたように笑いつつ、トロロはギロロの手を握った。
「来て、面白いコトを聞いちゃったんだよネェ」
ぐいとトロロはギロロの手を引っ張った。
「ちょっと待て！！」
「そっちの隊長のコトダヨ？」
その言葉に、ギロロは硬直する。
「……そうか」
後ろに手招きしながら、ギロロはなすがまま宇宙挺に体を滑り込ませた。

※※※※

駆け込んだ物陰で、弥々華はひっそりとしゃがみこんだ。
体力の消費が、いつもより激しい。
2人を下ろすと壁に背を付け完全に腰を下ろした。
2人は、喋らない。
「……クルル、顔痛くない？」
「そりゃ痛ェだろ……どっか切ったみてぇだ」

「見せて」
弥々華はクルルの顔を掴むと、唇に手をやった。
「治していい？」
「勝手にしろ……」
その瞬間、クルルの唇に温かな感触が流れる。痛みは僅かだが落ち着いた。
「クルル……隊長……」
弥々華は2人の名前を、呼んだ。ケロロは弥々華の隣に腰掛ける。
「なんでありますか？」
「あたしバカだから、あんまり良く分からないけどさ」
クルルの顔から手を離すと2人の顔を交互に見る。
「あたしは隊長もクルルも……ギロロもタママもドロロも、みんな信じてるから」
その言葉はシンプルで、とても真っ直ぐ。ケロロは小さく笑う。この少女は、変わらない。
「弥々華殿……」
そうケロロが吐き出した時だった。
「いたか？」
「まだだ。畜生、どこへ隠れやがった……」
不意に響いた声に、3人は息を詰まらせる。
その声は極めて近い。
多分不用意に飛び出せば、容赦ない攻撃を掛けられる距離だろう。
見つかるのは時間の問題か。
「弥々華殿」
ケロロは極めて静かに、口を開いた。弥々華はケロロに視線を合わせる。
「まだ、戦えるでありますか？」
その言葉に、弥々華はふっと微笑んだ。
「大丈夫」
弥々華はそう言って、立ち上がった。

※※※※

「これは……」
ギロロは思わず、声を上げた。ドロロは瞠目し、タママは首を傾げる。
クルルのＰＣのモニターには、先程格納庫で行われたやりとりが鮮明に記録されていた。
「軍曹さんが、２人？」
「片方はクローンだ、だろう」
その言葉に、トロロはこくりと頷いた。
「アイツはそう言ってタ」
「まずい事になったでござるな」
「あぁ……」
通じ合った様子のギロロとドロロに、タママは近寄る。
「どういう事ですか？」
ギロロはタママに目をやった。
「昔、奴のクローンがオリジナル《ケロロ》に反乱を起こした」
「過去の再来でござるよ」
その言葉に、ギロロは溜め息を吐き出した。
「また、起こるとはな」
ギロロは無意識に顔を横切る傷を撫でた。そして、立ち上がる。
「ドロロ、タママを連れて人質を探しに行け。俺はケロロを探す」
「御意」
「僕も軍曹さんを探したいです」
その言葉に、ギロロは静かに振り返った。
「駄目だ」
「でも――」

「アイツが、望まん」
それは、過去に裏打ちされた言葉だった。
「いいな」
タママは、気圧される。
「……了解ですぅ」
「トロロ新兵はここにいろ」
「りょうかぁ～い」
だらりとした返事に、ギロロは苦笑する。
だがすぐに表情を引き締めて、ギロロは歩き出した。

※※※※

不意に聞こえた物音に、男達は身を固くした。
「なんだ……」
「あっちか？」
男達は、武器を構えたまま音の出どころである曲がり角に近づいた。
あと、数歩で角へたどり着く。
男達の緊張がピークに達した、その時だった。
「彼岸華・乱舞」
不意に鮮明な声が、周囲を揺らす。次の瞬間、吹き荒れたのは黒風だった。
黒い風と化した弥々華は、高速で駆け抜けつつ男達をまとめてぶった斬る。
血飛沫が花弁のように舞い散った。
そして弥々華はやっと立ち止まる。刀を振って血飛沫を落とすと同時に、男達は地に伏した。
「隊長、クルル。降りて――」
弥々華が背中にしがみついたクルルとケロロに声をかけるため、僅

かに背後を向き、口を開いた時だった。弥々華は口を閉じると、前を見た。
「あぁ、もう」
弥々華は黒白風華を構え、息を吸い込んだ。
「もうお出まし？　正直、早すぎだよ……」
呆れたように呻いた先。無表情でこちらを見つめる少女に、弥々華は内心悲鳴を上げた。
「やっと、見つけました」
キララは、そう言って弥々華に右腕を突きつける。
「隊長、クルル。逃げて」
弥々華は黒白風華を振り上げると、２人を見ずに口を開いた。
「ここはあたしが――」
「弥々華殿」
不意に口を開いたケロロに、弥々華は目を僅かに開いた。
「我輩も、戦うでありますよ。弥々華殿１人にいい格好させる訳には行かないであります」
どこからか取り出したモーニングスターを、ケロロはくるりと回す。
「さっさと片付けて、ケロン星を取り返すであります」
弥々華は半歩下がると、ケロロに頷く。
「了解」
「クルルは下がって。支援頼むであります」
「了解ィ」
クルルもどこからか銃を取り出し、構える。
「……お先！」
黒白風華を構えた弥々華は、そう言って地を蹴った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

CHAPTER：9　戦場でワルツを

「鑑定眼力」
ドロロの視界が電子的に変化する。見通すのは、扉の向こう。
1つ、また1つと生体反応を探し、視線を移す。
「ここでは無いようでござるな」
「えぇー、ここも違うですか？」
2人が探すのは、グランドスターにいるであろう生き残りだった。
「まぁ、虱潰しでござるから……」
ポンとドロロはタママの頭に手を置いた。実際虱潰しに探すしか無いのだ、この状況では。
「それじゃ、次行くですぅ……」
ふぅとため息を着いたタママの背を眺めて、ドロロも歩き出した。
その瞬間だった。
「――！？」
「どうしたですか？　ドロロ先輩」
タママがただならぬ気配を漂わせたドロロを振り返る。その気配は先程までの穏やかさとはかけ離れた殺気。
「何奴」
静かな言葉に、タママは廊下の奥を見た。
「……あ」
タママは思わず、手を振りそうになった。
だが、すぐに押しとどまる。
「軍曹さんじゃ、無い」
ドロロは内心、頭を抱えた。
ギロロが憂慮していた事が、現実となったのだ。
オリジナルの鏡写し、クローンケロロは、冷徹な殺気を纏い現れた。

※※※※

銃を構えたクルルが背後に走るのを見ることも無く、弥々華は刀を振りかぶる。
斬撃を放つと、後退。
そして出たのはケロロだ。
構えたダウンスターを振り上げ、打つ。
ダメージが入ったのだろう。キララが僅かにのけぞった。
さらに引くと、地面に立て蹴りを打ち込む。
そこに突っ込んだのは弥々華だ。
「風華――」
刀から滲んだ黒と白の衝撃波。
「招来！！」
純然たる力が、キララを斬る。
吹き飛ばされたキララは、回転し壁に足を着いた。体に斜めに切り裂いた痛々しい傷から血が流れる。だがキララは表情を変えない。
しなやかに膝を曲げると加速を付けて飛び上がる。
突き出した右腕は、肥大化。
触手と弥々華の黒白風華が、噛み合う。
「ほかくをだんねん」
その言葉の意味を、弥々華は理解出来なかった。
「ひ！？」
だが、次の瞬間起きた衝撃に小さな悲鳴を上げる。
キララが触手を伸ばし、弥々華の腕に絡ませたのだ。
さらに黒白風華ごと引っ張れば、当然の如く悲鳴が上がる。
「やだ！！　止めて！！」
弥々華の足がずるりと動いた時だった。
「そこまでにするであります！」
ダウンスターをナイフに持ち替えたケロロが、キララの頭を狙いナ

イフを投げた。
キララは弥々華を離すと、ナイフから身をそらす。
左手にナイフ、右手に銃を握ったケロロは、キララに向かい銃を撃つ。
キララは右腕でガード。弾丸を振り払う。
「……痛みとか、ないのか？」
白い体に流れる血。
壮絶とも言える負傷だが、表情は変わらない。
一方、キララが定めた狙いは変わらず。弥々華に向かい跳躍。
振りかざした右腕を、弥々華は飛んでかわす。
さらに追撃。キララは触手を伸ばし、捕食を狙う。
後退。
ケロロは背後に回り、ナイフを振りかざした。
狙うは、左腕。
触手をかわした弥々華も、追撃。黒白風華を寝かせ、突きの姿勢へ。
狙うは、右腕。
キララは、目を見開き天井を見た。
かわすにも高さが足りない。
２人の剣先が僅かに触れた、瞬間だった。

――ドクン

弥々華の表情が、変わる。
「あ……」
低い、呻き声。
視界が、反転。
瞳の黒は抜け落ち、ぼやけた深紅が戻る。
全能深化が、解けたのだ。
力が、抜ける。
「弥々華殿！！」

ケロロの悲鳴に、弥々華は自分が倒れた事を知った。
指先すら動かない。
極端な疲労、薬剤の麻酔が全身に回る。
声すら、出なかった。

※※※※

「……隊長殿の、クローンとお見受けする」
ドロロは、静かな瞳で闇の向こうに立つクローンケロロを見据えた。
その瞳に、感情は無い。
「オリジナルの所の、暗殺兵（アサシン）でありますか？」
ケロロと寸分違わぬ声が、響く。
「名前は確か……ゼロ――」
「忌まわしき旧名は、捨て申した。ドロロ、それが拙者の名前」
修羅にも似た気配を纏い、ドロロは刀に手を掛ける。
「どっちでもイイであります。どうせ我輩には関係ないんだし、ネ？」
ケロロの表情は、全くその意図が読み取れない。ただ、無表情でケロケロと笑う。その表現に矛盾は、無い。
「あ……」
2人の気配に呑まれたタママが、口を抑えた。
「誰、でありますか？」
気付かれた、とタママは息を飲む。宇宙港で会った時とは違う混じり気の無い殺気と、威圧感。
見たことの無いケロロの表情（かお）が、タママの脳髄を恐怖で揺する。
「タママ殿」
その時だった。
穏やかな気配が、タママに触れた。僅かだが、恐怖が和らぐ。

「ギロロ殿の所へ、早く」
その言葉に、タママは飛び上がる。その意図は、すぐに理解出来た。
「は、はいですぅ！！」
タママは、走る。
その感覚は、逃走に近かった。

※※※※

キララは右腕を軸に、ケロロを蹴り飛ばす。狙い澄まされた足は振りかぶったナイフを弾く。
さらに足の軌道を下げ、腹部を狙う。
「ゲロ！？」
文字通り、ケロロは吹き飛んだ。
「あなたはお父さまのしょうがいになる……」
キララは幼い顔で呟くと、弥々華に右腕を突き出した。
弥々華はピクリともせず、死んだように目を見開き横たわっている。
「弥々華殿ーッ！！」
ケロロの叫びも、届かず。
弥々華の腰を触手が捉えた。
筆舌尽くしがたい水音が響く。
弥々華は悲鳴も残さず、ただ静かに捕食された。

※※※※

「伍長さぁん！！」
ギロロは存外速く見つかった。悲鳴のようなタママの声に、ギロロは振り返る。

「どうして付いて来た！？」
急に怒鳴られタママは僅かに萎縮したが、すぐに立て直す。
「違うんです！！　ドロロ兵長が、大変なんです！！」
キイキイとした甲高い声に、ギロロが表情を変えた。
「ドロロが？」
「軍曹さんのクローンが！」
ギロロの目が、僅かに見開かれた。
「ケロロはそこにいたか？」
その言葉に、タママは首を横に振る。
「分かった。お前は生き残りを探せ。俺はドロロの所に向かう。いいな？」
冷静なギロロの言葉に、タママはぶんと首を振った。
「了解です！」
「で、奴はどこにいる？」
タママが指差した方向にギロロが走り出す。
タママはその背中を、見つめていた。

※※※※

生きている。それだけで上々と喜ぶ気にはなれなかった。
水中に近いその世界と、喰われたと言う事実。
トラウマを想起する現実に、吐き気がした。
寒くて暗い。なんとなく、その光景は記憶にあるような気がしたが
記憶は掘り起こさなかった。
ただ、流されていく。
死ぬのか？　こんな所で。

妙に冷静な頭が問いかけた、瞬間だった。
「あ……」
光が、見えた。
その光に向かい、流されていく。
刹那、弥々華の世界が光に満たされた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＣＨＡＰＴＥＲ：１０　夢幻の中で

眩い光が晴れ不意に見えた景色は、先ほどまでいた研究室らしかった。ただその様子は、先程までとは大分異なっている。
明るく清潔さが際立つ研究室には、巨大な筒状の水槽が安置されていた。
視界が意識とは関係無くゆっくりと上昇する。

あ！

弥々華が声を上げた――ただその声は頭に響いただけだったが――のは見慣れた顔があったからだ。

……え、嘘……なんで？

薄桃色の液体の中にいたのはケロロだった。だがケロンスターは無く、その眼は固く閉じられている。
「被検体Ｋ－６６－３１２。小生の、最終兵器」
纏まらない思考の中、背後から声が聞こえたかと思うと視界は意志と反して振り返る。
先程までとはどこか雰囲気の違う、若さすら感じさせるサティティはＣＤ－ＲＯＭのようなものを片手に笑っていた。
「それは、なんですか？」
「これかい？　これは面白いプログラムでね」
サティティがＲＯＭをケロロの入った機械に入れると、ケロロの額にコードが突き刺さる。
「力を解き放つのさ。この被検体なら……隊長の素質。もしキララなら、キルルの力」

力を……解き放つ？
弥々華は思わず復唱する。
その言葉は、弥々華の記憶が知っていた。
まさか……あの――
記憶が光景と合致した瞬間だった。世界が前触れなく、暗転する。
声にならない悲鳴を上げた弥々華の世界は、反転した。

※※※※

刀を打てば、ナイフで返される。ならば体術でと突きを放てば、かわされるか真っ正面で受け止められる。
ドロロとクローンケロロの力は、拮抗を保っていた。
「アサシントップはそんな物でありますか？」
前言撤回か。クローンケロロはいまだ余裕だ。接近し刀をナイフで受け、真っ直ぐに膝蹴りを入れる。
ドロロはそれをとっさに腹部を引き締め受けた。吹き飛ばされたように跳び、ダメージを軽減。
天井に足を付け、三角跳びの要領で加速。
刀を僅かに引く。
狙うは……頸動脈。
その時だった。
不意に響いた風切り音。
「……！？」
銀色の線は頬を覆う布に、掠めた。
ナイフが背後の天井に音を立てて突き刺さる。

だが、ドロロはそれを無視した。地面に下りる寸前、刃先がクローンケロロの喉に触れる。
あと、数ミリ。
ほんの少し力を込めれば、死ぬ。
だが。
「出来ないでありましょう？」
その時、不意にクローンケロロが口を開いた。
「アサシントップはオリジナルにご執心でありますからな」
クローンケロロはドロロの腕を掴むと、1歩だけ退いた。
「拙者は――」
ドロロはそのまま、力を込める。刀がまた、喉に近付いた。
「隊長殿を、またあのような目には合わせたくないのでござる」
ご執心、あながち間違えでは無いと僅かに自嘲する。子供の頃から、世界はそう回っていたから。
更に力を込めれば、喉に刃が密着する。
「クローンは、またケロロ君を泣かせるでしょう？」
それは素の表情なのか、暗殺者としての表情か。静かにドロロはクローンケロロを見た。
「お前も、そうなんでありますな」
クローンケロロは哀しげに、呟いた。だが、その表情はすぐに切り替わる。静かな憎悪が瞳に掛かり、殺意が腕にこもる。
「なんで、オリジナルばっかり」
子供じみた言葉とともに、クローンケロロの瞳が静かにドロロを射抜いた。吸い込まれそうな黒い瞳に、魅入られる。
隙へと繋がりかけた、その瞬間だった。
「避けろ！！　ドロロ」
幼い頃から知った声が、ドロロを現実へ引き戻す。
ドロロは腕をクローンケロロの手から抜くと、とっさに横へ転がった。
次の瞬間、一筋の火線がケロロの足に吸い込まれた。

※※※※

視界が晴れたのは、数秒後。
弥々華はゆっくりと目を開く。

ここ、またさっきの。

声が出ないのは相変わらず。視界も相変わらずだった。
ただその研究室は薄暗く、現在と変わらないと言えるだろう。サティティは視界の奥で、モニターと会話していた。
「あぁ、そうだとも。クローンの研究データ、それに力を覚醒させるウィルスさ」
モニターの向こうにいるであろう相手の声は聞こえない。
「なに、昔のデータだが保証する。被検体は1人しかいないがね」
その愉しげかつ明瞭な声に、弥々華は寒気すら覚えた。
だが、サティティは声に苛立ちを混ぜ言葉を繋ぐ。
「なに？　安すぎる。倍はくれないと……ふむ、それならいいだろう」
どうやら交渉は成立したらしい。サティティの表情に暗い笑みが浮かぶ。
「恋人によろしく。幸運を、アンノウン」
さらりと吐き出された言葉に、弥々華は目を見開いた。
アンノウン、その言葉で繋がったのはただ1人の男。

まさか……。

サティティはＲｅｓｉｓｔａｎｃｅと手を結んでいた。

事実ならば、大事件だ。
現在か分からないこの世界で、弥々華は1人呆けていた。

※※※※

ケロロはただ、無音でキララを見詰めていた。キララも言葉を発せずケロロを見詰める。
空気は、変わった。
弥々華が喰われた瞬間、2人の関係は逆転した。
キララはケロロを見詰めていた訳では無かった。
動けない。ケロロの発する『威圧感』に呑まれ、身体が動く事を放棄したような感覚だった。
「『貴様』」
ケロロが、不意に口を開いた。
冷たい声が、響く。
ケロロの表情には深く影が差し、読み取ることは不可能だった。
「『茨田弥々華曹長を、出せ』」
その言葉に、小さくキララが悲鳴のような声を上げる。
その刹那だった。
「あ……」
右腕が、ゆっくりとつり上がる。本人の意志では無い。
「いや……やめて」
キララの表情が、初めて明確な恐怖を示した。
つり上がった右腕が、ボコリと泡立つ。
「あ……あ……あぁ！！」
悲鳴。
泡立ち続ける腕。
左手で右腕を抑えるも、泡立ちは止まらない。

「『出せ』」
ケロロがそう呟いた、瞬間だった。
ぐじゅり、と粘液の音が響く。
勢い良く右腕からぶちまけられた粘液の中に、弥々華の姿はあった。
「……げほッ！！」
力無く横たわっていた弥々華は、はっきりと咳き込むとえずく。
そして、ゆっくりと視線をケロロに向けた。
「隊長……？」
ケロロの表情から、憑き物が抜け落ちる。
「弥々華……殿。無事でありますか？」
「お陰様で」
ふっと笑って、弥々華は軽口を叩く。起き上がれないまま、弥々華はキララを見た。
キララは目を見開き、肩で息をしながら肥大が収まった右腕を抑えていた。
その横顔は恐怖で一杯だ。
「奴はもう、戦う気はないでありますよ」
ケロロの言葉には核心じみた何かがあった。
「それよりも、サティティ中佐と……我輩のクローンを止めなきゃであります」
ケロロの言葉に、弥々華は頷く。
「了解」
ふらふらと立ち上がりながら、弥々華は先程の光景を思い出す。キララの中で見たあれは、一体なんだったのだろうか。
「弥々華殿？」
「あ……いや、なんでもない」
弥々華は無意識に頭を振った。きっとあれは、夢か何かに違いない。
「それより隊長。これから、どうすればいい？」
先程の光景を振り払い、弥々華はいつものように問いかけた。
「とりあえず、サティティ中佐を止めるであります！　クローンは

その後」
「了解！」
湿った背中にケロロが飛びついた事を確認し、弥々華は地を蹴る。
そして２人はその場から姿を消した。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3113x/

Cross universe ～The avenger of blood from the past～

2011年12月11日01時54分発行